

## 環境配慮型生活における生活質感評価法の研究 I —生活モデル模索への覚書—

横川 公子, 森田 雅子, 岡田 春香, 黒田 智子, 佐々 尚美,  
鈴木 優里, 富田 高代, 中谷 幸世, 西田 徹, 水野 優子, 山本 泉  
(武庫川女子大学生活環境学部生活環境学科)

### “Assessment Project for Criteria for Human Life Quality” Part I Notes for an analysis of the lifestyle model.

Kimiko Yokogawa, Masako Morita, Haruka Okada, Tomoko Kuroda, Yuri Suzuki, Naomi Sassa  
Yuri Suzuki, Takayo Tomita, Sachiyo Nakatani, Toru Nishida, Yuko Mizuno, Izumi Ymamoto

*Department of Human Environmental Sciences, School of Human Environmental Sciences  
Mukogawa Womens' University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

#### Abstract

The present thesis reports of the activities of a Team project “Assessment Project for Criteria for Human Life Quality”, established by several members of the Department of Life Environmental Sciences. Preliminary research was mainly conducted in areas of consumer products use, housing facilities, as well as the cultivation of public opinion and attitudes towards low energy life. The high accumulation of systems and functions, the rational and rigid differentiations of tasks and areas, typical of city life, aggravate the alienation of the individual and accelerate the consumption rate of material and energy resource. Further research is necessary, therefore, to relocate the areas in which the needs for privacy and property can be reformulated to embrace a more organic and cyclic concept of life.

#### はじめに

生活環境学科生活質感研究会(横川公子代表)は様々な生活領域(衣生活領域, 住生活領域, 生活財—地域共同体領域, 地域共同体領域—開発と景観, 象徴的領域)の生活質感の評価法を策定し, 環境配慮型生活モデルや生活質感の向上を模索するために設立された。現在, 生活質感研究会は月例研究会を開催し, 研究作業をすすめている。研究会の最終目標は上記5つの生活領域において生活質感評価方法を策定し, 環境配慮型生活モデルを構築した上でモニタリングを実施し, モニタリングによるフィードバックに基づいた洗練化と生活モデル再提起を行なうものである。本研究会では環境を「人と外界との関係性」と定義し, 資源(空気・水・光・エネルギー・生命・食物), 道具・装備の連鎖と循環のあるべき姿を模索し, 人間生活の質を自然界との連続性, 暮らしにおける価値意識の視点から再考する。研究領域の全体構想を図1に示す。

大量消費, 大量廃棄を前提とした企業方針への疑問とともに環境負荷軽減の問題は各生活者の問題としてクローズアップされている。装備のイノベーションによる事態の刷新に期待しつつも, 同時に環境アプローチによる各地域での環境負荷の緩和努力が求められている。LOHASなどのライフスタイルの流行にみられるように, 合理性・実利性のみの追求では破局を迎えるとの危機感も, 〈ファッション〉と

して広まりつつある。しかし生活者の日常生活の営為のなかで、環境アプローチはなかなか守れない。

そこでまず、多様な視点から生活者の生活行動事例を研究し、生活者の感じる様々な制約や違和感を詳細に検証し、生活質感の評価方法や生活質感改善の問題解決法を、モデル提示→モニタリング実践を通じて提起する。

さらに物質生活改良や利便性向上とは一致しない部分での満足感達成のために必要な、象徴的領域における価値観操作の可能性を探る。

本報告ではまず、生活質感研究会の研究目標を示す。次に、予備段階として調査研究が先行する各生活領域(衣生活領域、住生活領域、生活財-地域共同体領域、象徴的領域の4領域)に関して、生活行動の規範・規準の抽出の結果の一部について報告し、今後の短期的研究課題を提示する。

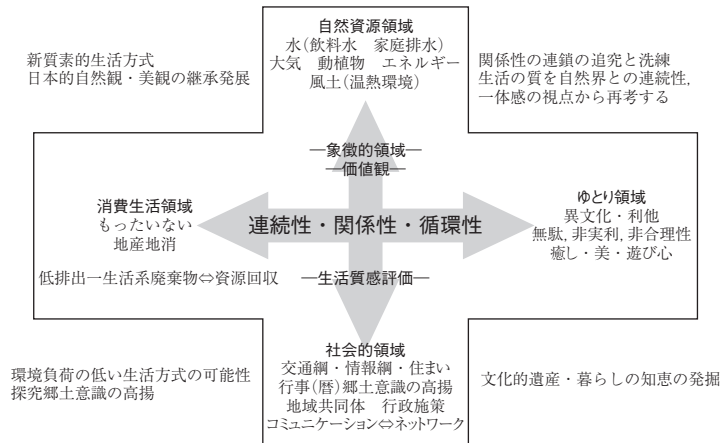


図1 研究領域の全体構想

21世紀型生活モデル構築・生活者意識変革の可能性研究について

## 結果および考察

### 1. 衣生活領域

衣生活領域では、環境配慮型生活における生活質感に関連する重点テーマとして「中古衣料品リサイクル」について取り上げ、中古衣料の回収から再生・再利用までのシステムを確立するために必要な要素を抽出する。また、それに付随した事例研究として中古素材を利用した「家庭環境における手作り(手芸)の意味合いについての調査研究」をおこなう。ここでは、予備段階での調査結果の一部を提示する。

#### 1.1 中古衣料品リサイクル

##### (1) 中古衣料品リサイクル調査の目的と概要

中古衣料リサイクルのシステムを構築し、モニタリングにより検証し、古衣料の回収から再生・再利用までのシステムの確立に必要な要素を抽出することを研究目標とする。均質ではない衣料品を大量に集めて別の製品に大量に再生するのは、逆に効率的ではない側面がある。そこで本研究では、再生用途の中でも、「衣料品」を「繊維」にまで戻すのではなく「衣料品」または「布」として使用する「再使用」の可能性について探っていくこととする。

衣料品の再使用の例としては、中古衣料品を販売するリサイクルショップなどが一般に広く知られているが、国外・国内の被災地や施設などに中古衣料品が寄付される例も少なくない。現状では、これらの寄付のほとんどがボランティアなどの一部の人々の積極的な善意で成り立っており、一般的な生活者が日常生活の中に組み入れられるシステムにはなっていないことがうかがえる。そこで今回は、寄付衣料がどの程度必要とされているか、どのように利用されているのか、国内での事例を3件調べた。

##### (2) 調査事例

###### ①社会福祉法人ベテスダ奉仕女母の家 長期婦人保護施設 かにた婦人の村(千葉県館山市)

かにた婦人の村は、日本で唯一の「婦人保護長期収容施設」となっており、社会福祉法人ベテスダ奉仕女母の家が経営している。その設立の背景などから書籍やテレビなどでも紹介されることが多いため、全国的に有名な施設となっている。またこの施設ではただ保護するばかりではなく、農作業による自給自足や、生産作業による現金収入など、個々の能力に応じたレベルの「自立」も目標としているようである。

かにた婦人の村には、全国から不要になった衣料品が年間 3 万箱も宅配便で送られて来る。これらの衣料品は、一番良いものを「寮生の衣類用」に取り分け、次に「バザーで売れる物」、「古着として輸出できるもの」、「ウエスにするもの(木綿)」、「その他」に分類される。バザー品やウエスの売り上げは施設の運営資金に充てられる。「その他」に分類された布は細かく裂いて、寮生が製作する「裂織」の横糸として使用される。「ウエス」とは工場などで機械などを清掃するために使われる拭き取り布のことである。また「裂織」とは、布を細く砕いて、横糸として織り込んだ織物のことである<sup>1)</sup>。

この施設では、これらの中古衣料品を利用する方法を検討することにおいて、時間的にも生産的にも制限は無いと考えられるので、相当に考え尽くされ、徹底して試されているであろうと思われる。そこから考えて、この施設で行われている中古衣料品の利用方法以外の方法を探し出すのは、難しいことなのかもしれない。

②社会福祉法人「協同の苑 六甲アイランド」(兵庫県神戸市, 取材日: 2006 年 6 月 23 日)

この施設では、婦人用パジャマ、タオルなどが個人から、あるいはボランティア団体を通して寄付品として送られてくる。衣料品をそのまま利用することは少なく、小さく裂いて「ふきとり布」として利用されることがほとんどである。寄付されるようになった経緯やルートははっきりしないが、口コミやボランティアの人のツテではないかと思われる。

この施設では中古衣料品を利用したふきとり布は必需品ではあるが、「寄付」と「ボランティア」という不安定な要素に頼ることになり、供給量が定まらない様子がかがえた。

③社会福祉法人 太子福祉会 特別養護老人ホームみどり園(兵庫県加古川市, 取材日: 2006 年 6 月)

この施設では、木綿製品の T シャツおよび靴下を中心に寄付を受け付けている。食べこぼしが多いため、T シャツ、トレーナー、ブラウス、パジャマはよく使用する。外出しないのでコートなどは使用できず、処分することもある。また、靴下は紛失が多いため、多少いたんでいる物でも使用できる。T シャツなどの衿ぐりや、靴下のゴムなどがゆるんでいても、着脱させやすいのでむしろありがたい、とのことである。寄付された衣料品は、主にデイサービス利用者の着替えに使用されている。

以前は長期入居者にも使用していたが、利用者の家族が中古衣料を希望しないケースが年々増えてきており、使用量は減少傾向である。肌着も過去には寄付中古衣料を使用してきたが、今後は新品のみにしようとしているところである。いたんだタオルや衣料品を切ってふき取り布にしたこともあるが、日常的に行っているわけではないようだった。

供給量としては、地域の寄付(婦人会、子供会など)で足りており、また仕分けなどはボランティアに頼っているため、地域ボランティアの口コミなどもあるのではないかと、とのことである。

この施設では、これまでは中古衣料品は必需品であったと言えるが、入居者本人以上に周囲の人々の意識の面から利用が難しくなっている状況が感じられた。

(3)事例に見る衣料寄付の問題点

使用感がある中古衣料品にも利用価値はある。震災直後のような非常時では、救援物資として送られてくる中古衣料は「仕分け・配分に要する時間と労力が膨大なものであり、場合によっては本来の応急救助業務に支障を及ぼすおそれもある」<sup>11)</sup> かもしれないが、物資と人手を正しく配分できる状況であれば、必ずしもそうとは言い切れないのではないかと。実際にはそのまま衣料として着用されたり、ふきとり布として再生利用されていて、適正な場所とタイミングにおいては中古衣料品も必需品となり得るのである。しかし寄付もボランティアも善意に頼るものだから、もらう方から求めるわけにはいかない、寄付の出所を追求することで催促になってしまっただけとはいかない、という意識があり、必需品となりえていない。このように、聞き取り調査を通して、双方が中古衣料品を提供したい、提供を受けたい、という意思を持ちながらも遠慮しあっている状況を感じた。しかし、(2)①の例のように、お互いが提供しやすい・されやすいシステムを確立させてしまえば、いずれ需要と供給のバランスは取れていくのである。一方では中古衣料品がゴミとして捨てられたり、回収されても用途が少ない状況にあり、他方では中古衣料品が必要とされる場が存在するのであれば、一般生活者が日常生活の中に組み込みやすい窓口を何らかの方法で確保することで、お互いが躊躇せず、逆に押し付け合うこともなく、中古衣料品の再

使用の可能性が広がるのではないだろうか。

#### (4) 今後の課題とまとめ

今後の課題は、中古衣料品の寄付ルートを安定させること、寄付ルートを明確にすること(一般生活者にアピールする)、需要を見直し明確にすること、仕分け・ウエスなどへの再生のシステムを確立すること、中古衣料に対する提供する側とされる側の双方の意識を変えること、などである。

平成 18 年度の厚生労働省の介護サービス施設・事業所調査によると、全国に介護老人福祉施設は 5716 施設で、利用者は 392547 人であった。これ以外にもデイサービスのみの施設なども含めれば老人福祉施設とその利用者は膨大な数である。当面、これらの施設だけに提供先を絞って考えても、かなりの中古衣料品の再使用・再生が可能であると考えられる。今後は、これらの課題をモニター調査などを通して検討していきたい。

### 1.2 家庭環境における手作り(手芸)の意味合いについて—中古素材の利用による思い出作り

#### (1) 家庭環境における手作り(手芸)の意味合いに関する調査の目的と概要

手芸とは、生活の範囲内で使用する実用品等を、家庭内において制作する行為であり、広く一般的には、その行為自体は「個人の趣味」として認識されている。しかし、例えば、母親が自分の子供のために洋服を作ったり、子供が自分の母親のためにエプロンを作ったりという行為を垣間見た場合、単に「個人の趣味」による行為であるとは考えにくく、別の何かが内包されていると考えられ、この何かが生活に対して何らかの効果をもたらししていると考えられることができる。

2008 年 8 月住民宅を訪問し、詳細なインタビューを行った。調査対象は神戸市長田区雲雀ヶ丘の住民であり、この場合地域的な特性等には配慮しないこととする。女性 4 名に対する聞き取調査であるが、性別間の特性等についても言及しないこととする。また、回答人数は 4 名と少数ではあるが、内容の濃いインタビューを行うことができたので、十分有効なデータとなった。

#### (2) 調査結果

自分の周りの誰かをきっかけとして、手芸を始めるというケースが多いようである。しかし、たとえ周りが手芸をする環境にあったとしても、その人自身の興味や性格によって、するしないがわかれるということであり、これこそ、手芸が「趣味」の枠組みで捉えられることの所以であると言える。

生活における手芸の位置づけ、手芸がもたらす効果について次のことがわかった。

- ① 他者との関係をきっかけに始められることが多い。
- ② 作品のほとんどは、家庭内で使用されるものであり、半永久的に保持されるものである。
- ③ 自分ではなく、他者の満足のために、作品を作るという場合が多い。

この特徴から、手芸は、単にその行為をする人が楽しめるだけでなく、家庭内に明るさや暖かさを、家族に優しさや嬉しさを与えるという効果を持ったものと言うことができる。

#### (3) まとめ

まとめると、手芸は単なる趣味であるのだが、その行為自体から楽しみを享受できるだけでなく、その後により大きな楽しみ、喜びを得られる趣味であるということがわかった。手芸をしているとき、その意識は愛情や楽しみに支配されており、その意識が作品と言う形に表現される。すなわち、手芸は、愛情を具象化するプロセスと言っても過言ではない。近年手芸を趣味とする人が減ってきていると言う。この素晴らしい行為は、より多くの人になされることが望ましく、この愛情の総和を大きくすることが、社会全体の優しさ、明るさ、幸福につながる事が期待できる。

## 2. 住生活領域

住生活領域においては、環境配慮型生活における生活質感に関連する重点テーマとして、「室内温熱環境のニーズの抽出」と「集合住宅における和式生活の効用」について取り上げる。ここでは、今後の短期的研究課題について述べることにする。

### 2.1 室内温熱環境のニーズの抽出

日常生活において環境に配慮した生活を心がけ、取り組んでいくことは、今後必要不可欠となっていくと考えられる。例えば、住まいの中での省エネルギーの取り組みとして、建物自体や設備の工夫や住

まい方の工夫などが考えられる。

これまでに、住宅内のエネルギー消費量への寄与度から、「地域」「世帯人数」「保有機器台数」「省エネルギー実行度」のエネルギー消費量への寄与が高いこと<sup>iii</sup>、省エネルギーに努めると、倹約的な生活でありエネルギー消費量が少ないこと<sup>iv,v</sup>、電気やガスなどの節約の有無が季節により異なること<sup>vi</sup>が報告されており、住まい方や意識などにより消費エネルギーは異なることが示唆される。更に、住まい方は意識と関係が強いと考えられ、省エネルギーな住まい方、環境に配慮した生活には意識を高める必要が考えられる。地球環境問題に対する意識を高める方法として、アンケート票を用いた意識啓発手法の検討<sup>vii</sup>などが試みられているが、効果が限定的であり、倫理的問題なども危惧されており、更なる検討が必要である。また、空調エネルギーの予測を、節約行為を考慮した冷暖房スケジュールのモデル化<sup>viii</sup>や室内温熱環境調節行為モデル化<sup>ix</sup>による予測の試みがなされているが、居住地域<sup>x</sup>や、暑さ寒さへの強さや暑がり寒がりなどの温熱的特性が異なることや、好む温熱環境は個人により異なること<sup>xi</sup>、室温への期待感の個人差<sup>xii</sup>など、要因は様々考えられ、更なる検討が必要である。

今後、環境に配慮した生活となる為には、居住者の意識の改革が必要である。しかし、居住者の属性や温熱的特性は異なり、個人差が大きい。居住者が快適に生活することができ、環境にも優しい住まい方となる為には、これらの居住者の多様性も考慮した意識改革を行う事が必要であると考えられる。

## 2.2 住生活 研究課題領域重点テーマ集合住宅における和式生活の効用【土間】

本研究課題領域では、日本建築におけるウチとソトの関係について調査し、そこで得られた結果をもとに、団地やマンション等の集合住宅での暮らしがより快適になるような、土間などの和式生活様式の提案を行う。具体的には、ウチとソトの境界を曖昧にする方法、手段などを提案する。そのため、日本、西洋、アジアの建築について文献調査すると共に、必要に応じて、現地調査を実施する。

団地やマンションに代表される集合住宅は、現代の都市で暮らすうえで欠かすことのできないものである。しかしながら、生活していくうえで不便を感じることも少なくない。このように、現代の集合住宅の不便さというものは、外部空間と内部空間とを完全に分けしようにとしたことに起因しているのではないかと考える。一方で、エアコンに代表されるような、人間が作り出した、人工的な環境(=内部空間)と自然環境(=外部空間)とを明確に区別することで、快適な暮らしを手に入れてきたのも事実である。ちなみに、この快適な暮らしは、環境に対する様々な負荷の上になりたっているものである。そこで、環境共生の第一歩として、集合住宅における内部空間と外部空間を緩やかにつなぐ空間の果たす役割について検討する。また、本研究では、その空間として、日本人が古くから住宅に取り入れてきた、土間に着目する。まず、従来土間として使用されていたところに現在では床を張って暮らしている人々に暮らしの上での土間の有無による違いをヒヤリング調査する。また、その結果をふまえ、現在、集合住宅に住む人へのアンケート調査を実施し、土間のある集合住宅についての住民の意識等、現状を把握する。そのうえで、現代の集合住宅における有効な土間のあり方を提案する。さらに、その提案についても、評価を受け、再検討を行う。

## 3. 生活財—地域共同体領域

生活財—地域共同体領域においては、環境配慮型生活における生活質感に関連する重点テーマとして、「贈与交換としての〈お買い物〉」を取り上げる。ここでは、予備段階での調査結果の一部を提示し、今後の短期的研究課題について述べることとする。

### 3.1 贈与交換としての〈お買い物〉

ヒトは生きていく中でさまざまなモノを消費する。現代社会においてはそのほとんどのモノを「買う」という行為を通じて、手に入れている。「買う」という行為は、「品物や金と引きかえに、自分の望みの品物を得る(広辞苑)」ことであるが、その行為の意味するところは、単なるモノとカネの交換だけではない。

ジャン・ボードリヤールは著書『消費社会の神話と構造』において、現代の大量消費時代にはモノの価値が「そのものの使用価値」ではなく、「記号としての価値」であり、消費はモノの機能的な使用や所有ではないとしている。生活の中における現代の「お買い物」とは、そうした「記号としての価値」をもつモノ

のやりとり, ひとつのコミュニケーションであるといえる。ボードリヤールは, 大量消費時代におけるこうしたモノの価値と消費の形態の変化に対して「われわれの生産至上主義的産業社会は希少性に支配されており, 市場経済の特徴である希少性という憑依観念につきまわられている。われわれは生産すればするほど, 豊富なモノの真ただ中でさえ, 豊かさと呼ばれるであろう最終段階(人間の生産と人間の合目的性との均衡状態として規定される)から確実に遠ざかってゆく。」と批判し, 真の「豊かさ」とは「人間と人間の関係…社会関係の透明さと相互扶助」であるとしている。

### 3.2 “お買い物”のカタチとオモイを探る

現代の“お買い物”のカタチは, 溢れるモノと情報化の進展により多様化している。インターネットショッピングやTVショッピング, 通販といった新たな“お買い物”形態が年々増加傾向にあり, 一方で, 「地産地消」に表される, より地域を重視した“お買い物”をはじめとする, 種々様々な形態へと広がりを見せ, “お買い物”のカタチは多極化の方向へと向かいつつある。

しかし, 空間にとらわれない“お買い物”が増加傾向にあるものの, 地域に密着した“お買い物”は生活のベースとして存在しつづけており, 地域特性に規定されていると考える。

多極化する“お買い物”のカタチを把握するとともに, 地域特性と“お買い物”のカタチの関係性を聞き取り調査およびアンケート調査より探る。また同時に, 日々の“お買い物”に対する意識, 生活感と“お買い物”との関係性について, 聞き取り調査およびアンケート調査より探る。

### 3.3 “お買い物”実態把握・予備調査

#### (1) 調査概要と回答者の属性

今後実施するヒヤリング調査のための予備調査として, 簡易アンケート調査を実施した。調査対象地区は, 多様な地域特性(農村, まちなか, 郊外)を有しており, 商業施設の立地, 集積状況等の構造を把握することに適していると判断した宝塚市とした。回答者は30歳代~80歳代の男女61名である。年齢は50歳代が11.5%, 60歳代が52.5%, 70歳代が27.9%と高齢者層が多く, 性別は男性が54.1%, 女性が41.0%となっている。

#### (2) 結果概要

〈食品・日用品の買い物について〉

①店の形態では, [1番よく利用する場所]では[スーパー]が圧倒的に多く全体の約8割を占める。②店までの交通手段として, [1番よく利用する場所]に対する交通手段は[徒歩]が41.0%と最も多く, [車やバイク]36.1%, [自転車]24.6%となっている。③買い物の頻度は, [ほぼ毎日][月に20回以上]がともに14.8%, [月に10回以上20回未満]が42.6%, [月に10回未満]が23.0%となっている。④利用理由として, [1番よく利用する場所]の利用理由としては, [品揃えがよい]が最も多く, 次いで[便利], [価格が安い]が上げられる。[2番目によく利用する場所]では, [品物がよい], [便利]が同数でもっとも多く, 次いで[品揃えがよい]となり, [3番目によく利用する場所]では, [品揃えがよい], [便利]が同数でもっとも多く, 次いで[品物がよい], [価格が安い]と続く。

〈買い物をする上で気をつけていること〉

安全性に関することで気をつけていることは, [産地が表示されている]が75.4%, [添加物等が入っていない]が42.6%, [生産者の顔がみえる]が32.8%であった。また, 環境に関して配慮していることがらとしては, [簡易包装]が44.3%, [容器がリサイクルできる]が37.3%, [環境活動に寄与する企業の製品]が18.0%であった。

### 3.4 まとめ

聞き取り対象者の所得層など社会的特徴を再検討する。「買い物」行動には利便性・経済性を最優先していることがわかる。しかしこれも一旦食品中毒事件や, 社会状況の違いによってはわかりやすいものである。

この協力者を対象として, さらに“お買い物”のカタチとオモイについて, 聞き取り調査を実施する予定である。

#### 4. 象徴的領域

象徴的領域においては、環境配慮型生活における生活質感に関連する重点テーマとして、「環境アプローチ(環境製品の普及)」「自然観・風習・慣習・タブーの意義(特にリサイクル・リユースに関して)」を取り上げるが、ここでは、それに付随した事例研究として、「環境コミュニケーションの役割に関する調査研究」、「ロングライフデザインの意味合いについての調査研究」についての予備段階での調査結果の一部を提示し、今後の短期的研究課題について述べることとする。

##### 4.1 自然観・風習・慣習・タブーの意義(特にリサイクル・リユースに関して)

ここでは、今後実施する短期的研究課題のみを列記することとする。

###### (1) 現況調査

地域のゴミ回収、不法投棄状況などを文献調査、フィールドワークなどを通じて詳細に行なう。特に生ゴミなどの活用状況について調査する。

###### (2) 清浄観の調査

〈利用する〉〈消費する〉〈捨てる(所有権を放棄すると仮に定義する)〉という行為を民俗学的・風俗史的視点を活用しながら検証し、〈清める〉という日本の清浄観の基軸となる価値観を抽出する。

###### (3) モデル提起

これらの調査を踏まえて、資源循環に関する啓発と有効転用を提示し、ゴミの減量をめざす回収モデルを検討する。

##### 4.2 環境コミュニケーションの役割—生活者の意識と行動を変え得るコミュニケーションとは—

昨今、環境問題に関心が高まる中、環境意識を普及するためのアプローチが企業やマスコミなど各方面からなされており、環境問題に対して何らかの対策をとるべきだとする風潮にある。また環境に配慮した新素材や新商品、また過剰包装を取りやめるなどで環境に配慮をした製品(以後、環境製品と呼ぶ)も多数開発されている。しかしながら、意識の普及アプローチや新技術の開発が積極的かつ躍進的に行われているにも関わらず、生活者への浸透は極めて遅々としている。本研究は、環境コミュニケーションに注目して、環境製品および環境アプローチが生活者へ浸透しない要因を探り、その要因を改善し得るモデルを模索することで、環境製品および環境アプローチと生活者とをつなぐ新たな方法を見出すことを目的としている。

###### (1) 環境コミュニケーションとは

環境省では、環境コミュニケーションを「持続可能な社会の構築に向けて、個人、行政、企業、民間非営利団体といった各主体間のパートナーシップを確立するために、環境負荷や環境保全活動等に関する情報を一方的に提供するだけでなく、利害関係者の意見を聞き、討議することにより、互いの理解と納得を深めていくこと」としている。また、海外の定義の例では、OECDによってまとめられた「Environmental Communication」の中で、「環境コミュニケーションとは、環境面からの持続可能性に向けた、政策立案や市民参加、事業実施を効果的に推進するために、計画的かつ戦略的に用いられるコミュニケーションの手法あるいはメディアの活用」という定義がされている。

###### (2) なぜ環境コミュニケーションに注目するのか

現在の大量生産・大量消費のライフスタイルの形成は、消費行動を促す広告活動の発達と深い関係があると考えられる。『新広告論』には「広告はその過剰な展開や表現形態の問題などを通じて消費者・生活者の日々の生活環境の悪化を招いている面が大きく、すでに論及したように「雑音ないし生活環境汚染要素」の側面が目目され、是正の必要性が強調され、極めて緊急性が高い問題となっている。」<sup>xiii</sup>とあり、現在の広告活動の問題点を指摘している。

###### (3) 現在における環境コミュニケーションの傾向

しかし、広告活動が現在の大量生産・大量消費のライフスタイルに影響を及ぼしているのであれば、それを改善し得るのも広告活動なのではないかと考える。日本では1980年代末頃から環境広告が行われるようになったが、初期の頃は主に企業イメージのアップを目的とした展開例が主であった。最近では広告主が自然環境の改善・工場へ貢献している具体的な活動内容を上げるものが増えてきている<sup>xiv</sup>。

#### (4) 今後の調査方法について

まず、現在のテレビコマーシャルと雑誌広告等において、環境への配慮がなされているものがどの程度存在するのか、また、それがどのような形で環境への配慮を表現しているのかを調査する。テレビコマーシャルの調査方法としては、任意のテレビ局数局について、朝・昼・夜・深夜の各数時間で放映されたテレビコマーシャルのうち、環境への配慮がなされているコマーシャルを抽出し、それぞれの頻度と表現方法を調査する。また、雑誌広告の調査方法としては、雑誌購買層および掲載内容のジャンルを考慮して選択した雑誌について、掲載されている雑誌広告のうち、環境への配慮がなされている広告を抽出し、それぞれの頻度と表現方法を調査する。

### 4.3 ロングライフデザインの意味

#### (1) なぜロングライフデザインなのか

大量生産社会になり、モノがあふれ、モノの扱いが粗末になっている。消費が激しくなってきた。そもそも「消費」とは、「欲求を満たすために財・サービス(商品)を消耗すること(広辞苑)」を指すが、現代社会における「消費」はこの定義に当てはまるものだけではない。モノの品質の低下、消費者の飽きの早さも一理あり、大量生産社会は大量消費社会ともいえる。こうした、大量消費社会における環境負荷軽減の問題は重要さを増してきている。モノを長く使うことを提唱すると同時に、長く使えるモノのデザインを探りつつ、環境配慮型生活の一つの捉え方として“ロングライフ”を提唱する。

#### (2) 調査概要

取り掛かりとして、食に関するモノに限定し、長く使っているモノに関するアンケート調査を実施した。被験者は20代4名、30代1名、50代2名、計7名の女性である。また項目は【長く使っているモノ】【使用年数】【メーカー名】【入手方法】【長く使っている理由】【生活での使用シチュエーション】の6つである。項目のうち、特に考察が見られたのは以下の通りである。

【長く使っているモノ】については、マグカップ・お皿・小鉢等食器類が6名、ヘラ・鍋等調理道具は1名、50代の女性が回答した。【使用年数】については、50代女性が共に25年、その他は10年未満であった。最短で1年である。【長く使っている理由】は大きく①握りやすい等の機能性からの理由、②季節感がある等のデザイン性からの理由、③購入時の様子が思い出される等の思い出からの理由と3つに分けることができた。【生活での使用シチュエーション】では、「コーヒーを飲むときは必ず使う。洗い終わっていない場合は洗ってこのカップを使う」「夕食時には使わない」などモノを使うときのこだわりが読み取れた。

今回は被験者の人数が少なく、年齢層にも偏りがあった為、各項目にばらつきが見受けられた。今後、被験者の人数、年齢層、性別等を考慮し調査を進めることにより属性別のモノへのこだわりを得ることが期待できる。さらにモノへのこだわりの分類化を目指し、こだわりを明確にすることによってタイプ別の有効なりサイクル方法やリサイクルショップの経営のあり方を探る。

## 結び

環境配慮型生活モデルを目指す上で生活質感評価法を策定するという目的で先行して4つの生活領域についての一部の調査結果、今後の短期的研究課題について述べてきた。誌面の都合で生活財-消費行動の領域、住領域について生活質感評価・生活モデル構築に向けての今後の課題について述べる。

住領域における温熱環境の問題は、生活質感評価の上で様々な要素を含んだ核心的かつ複合的問題である。生活者の視点からいうと、住空間の環境整備、つまり土地利用効率に逆行する再緑化の積極的推進、屋上緑化、建築様式・資材・計画の洗練が生活の質感を高めるであろう。また、生活者自身の身近なところでの生活意識では、発汗・着衣・露出に関するTPO尺度も含めて、全般的な低エネルギー生活様式への意識変革も必要だ。

生活質感評価のなかでは、「お買い物行動」の調査にみられるように、店の利便性、品揃えに生活者がこだわるところからもわかるように、一つのエリアでの様々な機能や機能の集積が重要なポイントであ



る。またスーパーでの買い物が好まれるところに「自由」または「匿名性」が生活者にとって好ましい材料であることもうかがえる。「お買い物行動」に「情報行動」、手芸活動などを通じた「想い出作り行動」などを関係させることへの期待と同時に、表面的「経済性」や分業による「利便性」ではなく、良質少量の消費、つまり「禁欲的消費行動」への意識改革が課題となる。また、経済性のような相対的価値の追求から、循環性、命の連鎖のような絶対的価値の追求に生活行動を転換する必要があるだろう。中古衣料再使用について振り返る。この問題の中核には中古衣料という属人性のつよい生活財の再利用の際に生じる忌避感の克服の問題であると思われる。これには、地域共同体の枠組みを利用した回収・集積方法・再利用のルールなどの道徳・衛生観に配慮したリサイクルモデルの構築を必要とするであろう。

住領域における「自己」、「他者」との境界をあえて曖昧にする「入り会い」の思想は生活質感を高める上で注目し得る。「消費行動」は「食べる」、かつ「捨てる」は「排泄」という生理的・本能的な根源があり、前者は好ましい「善」の領域、後者は象徴的「悪」の領域に割り当てられる。しかし、福岡県柳川水郷の事例でも見られるように、水路近くに暮らし、命の呑み水を水路で汲み、そして排水を庭の溜め池などでの段階的濾過を経てまた元の水路に戻し、また水路の自然を愛でつつ、水路を清浄に保つ循環的生活様式は柳川の人々の生活を守っている<sup>xv</sup>。「土間」も不浄の領域に割り当てられがちな「自然」を住空間に取り込み、「他者」との交流を呼び込み、かつ外界との緩衝帯をつくっている。表面的合理性、あるいはプライバシー尊重による住空間の「区画割り」ではなく、そのような「曖昧性」・あるいは「循環性」は生活質感を高め、「共同体意識」を高める上で非常に有効であると思われる。

以上、生活質感評価と生活モデル構築を綿密に行なうには、消費行動、廃棄行動、情報行動、交流行動、営巣行動など人間の生命再生のために不可欠な生活行動を循環性の観点から再検討し、インタビューにより「好ましさ」「疎ましき」のポイントをさらに詳細に抽出し、検証する必要があるであろう。

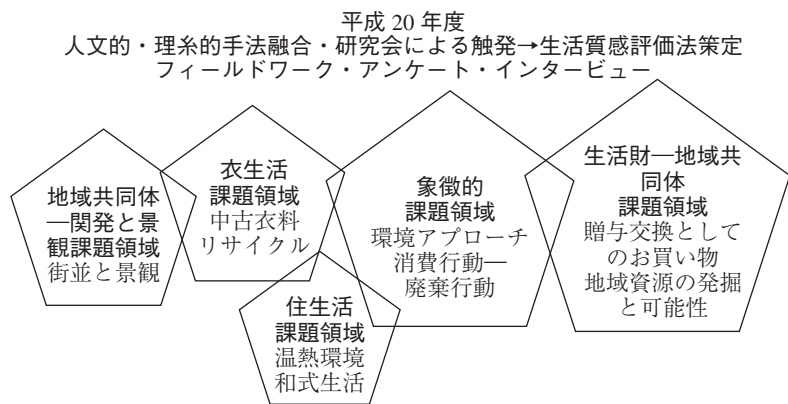


図 2 生活領域に関する調査研究テーマ

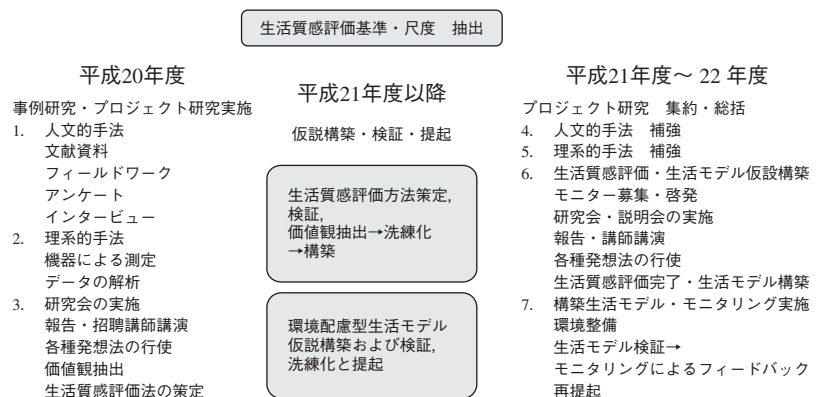


図 3 研究スケジュール

## 文 献

- i 八田尚子, 『裂織の本』, 晶文社, 2000年
- ii 「大規模災害における応急救助のあり方」, 厚生省・災害救助研究会, 1996.5
- iii 水谷傑・井上隆・小熊孝典・矢野慶一・田中俊彦, 全国規模のアンケートによる住宅内エネルギー消費の実態調査 その8 各要因の寄与度に関する検討, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 環境工学, pp.197-198,

2006.9

- iv 佐々尚美・磯田憲生, 省エネルギー意識と住まい方に関する調査研究 - 奈良市近郊の新興住宅地の戸建住宅を対象とした場合 -, 日本家政学会誌, Vol.54 No.11, pp.935-943, 2003.
- v 水谷傑・井上隆・小熊孝典, 住宅内における用途別エネルギー消費と住まい方の実態に関する研究 - アンケート調査に基づく分析 -, 日本建築学会環境系論文集, 第 609 号, pp.117-124, 2006.11
- vi 大和義昭・松原斎樹・藏澄美仁, 京都市および近郊の住宅におけるエネルギー消費量と居住者の意識・住まい方に関する調査研究, 日本建築学会環境系論文集, 第 586 号, pp.17-23, 2004.12
- vii 原田昌幸・久野覚・石原健太郎, 地球環境問題に対する住民意識と意識啓発手法に関する研究 第 2 報 - アンケート票を用いた動機づけの効果についての検討, 空気調和・衛生工学論文集, No.80, pp.37-48, 2001.1
- viii 森敦子・森山正和・漆原慎, 住まい方と節約行為を考慮した住宅の冷暖房スケジュールの作成方法に関する研究, 日本建築学会環境系論文集, 第 590 号, pp.43-48, 2005.4
- ix 羽原 宏美・鳴海 大典・下田 吉之 他, 居住者の室内温熱環境調節行為のモデル化による住宅の空調エネルギー消費の予測, 人間と生活環境, Vol.11, No.2, pp. 83-88, 2004.11
- x 鈴木憲三・松原斎樹・森田大・澤地孝男・坊垣和明, 札幌, 京都, 那覇の公営集合住宅における暖冷房環境の比較分析 暖冷房使用に関する意識と住まい方の地域特性と省エネルギー対策の研究 その 1, 日本建築学会計画系論文集, 第 475 号, pp.17-24, 1995.9
- xi 佐々尚美・磯田憲生・久保博子・梁瀬度子, 夏期における好まれる気温の個人差に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 531 号, pp.31-35, 2000.5
- xii 小林恵美子・他 3 名, 京都市の集合住宅居住者の意識・住まい方とエネルギー消費量に関する研究, 日本建築学会技術報告集 第 24 号, pp.241-244, 2006.12
- xiii 亀井昭宏・疋田聰(編), 『新広告論』, 日経広告研究所, p55, 2005.3
- xiv xiii と同様, p56
- xv 丸茂 悠・菊池成朋, 『日本建築学会計画系論文集』 第 564 号, 113-118, 2003.2